2016年６月８日

校内研究会資料

坂田康亮

「アクティブ・ラーニングにおける『学び合い』について」

１:「アクティブ・ラーニング」ってなに？

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

２：なぜ、今、「アクティブ・ラーニング」なの？

Ans:「大学入試が変わるからです。」

（１）：２０２０年、大学入試が変わります。

「これまでの知識偏重、１点刻みの「落とすための入試」から、学生の意欲、能力、適正等を多面的、総合的に判断できる制度へ」

そこで、２０２０年、センター試験が廃止され、新しい入試制度が導入されます。

①「高等学校基礎学力テスト（仮称）」

*2019年度導入。（文科省有識者会議の最終報告より）*高校１～２年の間に、複数回受けられるようにするイメージで設定される予定です。このテストの結果を大学入試で使うのは、現在のところ２０２３年度からとされています。

②「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」

２０２０年度から導入。自由記述を多くし、正解のないことがらについて、論拠を示しつつ説得力のある記述ができることを求めていく予定になっています。また、英語に関しては「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能が求められ、スピーキングテストが導入される予定です。*国語と数学の一部で記述式を実施。年複数実施は当面見送り。（文科省有識者会議の最終報告より）*

評価に関しては、「１点刻み」ではなく、「段階的表示」の予定です。

③各大学の個別選抜改革

各大学のアドミッションポリシー（入学者選抜の方針）、カリキュラムポリシー（教育の方針）、ディプロマポリシー（養成したい人物像）に基づく選抜が予定されています。これらを評価するために、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」に加え、小論文、面接、集団討論、プレゼンテーション、調査書、活動報告書、大学入学希望理由書、学修計画書、資格・検定試験などの成績、各種大会等での活動や顕彰の記録などが利用される予定です。

（２）なんで、大学入試が変わるの？

Ans：「就職」が変わるからです。

今後予想される社会状況は…。

経済のグローバル化、日本の少子高齢化が進むと…

「終身雇用と年功序列が終わる。」

日本はこれまでは職種にかかわらず採用する「メンバーシップ型」の採用でした。しかし、今後は春の新卒一括採用が消え、職種別にスキルのある人員を補充的に採用する、アメリカのような「ジョブ型」の雇用に変わる可能性が高いのです。

（３）どんな能力が求められるのか？

Ans：昔、先進国の答えを吸収できる力。今後は…。

正解のない問題に答えを創造できる力。

インターネット、人工知能、ロボットなどの技術革新

①社会人の基礎力（経団連：産業界に求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート 2011）

① 主体性
② コミュニケーション能力
③ 実行力
④ 協調性
⑤ 課題解決能力等

②世界を舞台に活躍できる人づくりのために（経団連：2013）

「グローバル人材のベースとなる社会人に求められる基礎的な能力（主体性、コミュニケーション能力、課題解決能力など）は、初等中等教育段階からしっかりと身につけさせる必要がある。」

☆つまり、「アクティブ・ラーニング」は、今後の経済の変化を見据え、10 年後、20 年後、30 年後の社会で生きていく子どもたちにつけさせるべき能力を育成するために登場したといえる。

３：今後の「最も大切な人生の目的」は…？

「仲間」「ベスト・パートナー」の存在こそが、「幸せ」と感じられる価値観に…。

４：『学び合い』こそ、「仲間」づくりの実践の場

（１）『学び合い』とは？

「学習スタイル」ではなく、「教育の考え方」です。

① 『学び合い』の考え方

「学校観」…「学校は、多様な人とおりあいをつけて自らの課題を達成する経験を通して、その有効性を実感し、より多くの人が自分の同僚であることを学ぶ場である」

「子ども観」…子どもたちは有能である。時に、一人の教師よりも。

「授業観」…「教授（生徒からすれば学習）を、生徒自身に任せ、教師は、課題の設定、評価、環境の整備をする」

② 一斉授業と『学び合い』に基づく授業のちがい

＜一斉授業＞
・教師が一方的に講義をし、子どもは静かに座っているのが望ましい。
・教師のペースで授業が進む。子どもは黙っている。
・わからない子がいても授業は進む。

＜『学び合い』に基づく授業＞
・教師は課題を与え、子どもは子ども同士で教え合い、学び合う。
・子どもは能動的に動き、他の子に教えたり、質問したりする。
・わからない子は、わかるまでクラスメートに聞くことができる。

（2）『学び合い』に基づく授業の実際

①：めあてに「全員が…」となり、自分一人が目標を達成すればよいのではなく、クラス全員が達成することがめあてになります。
②：①のために、生徒は自由に動き回り、分からないことを聞いたり、教えたりします。
③：授業の最後に、みんなが課題を達成するために最大限努力できたか教師が評価します。
　この授業では、生徒は誰に関わるか、どのように関わるか、相手を思いやり、自己判断、自己決定します。場合によっては、チームをつくり、分からない人を分かるようにしていきます。そして、全員課題達成を成し遂げます。

（3）『学び合い』に基づく授業の効果

○ 子どもたちが自分で何が分からないのかという課題を発見することができる。
○ 主体的に友だちに聞いたり質問したり、あるいは議論をしたりする活動を通して、考えを深めることができる。
○ どのような声かけや関わりをすることがベターなのか、うまく折り合いをつけるなど、人間関係構築の実践の場になる。

（4）教師がもつ視点

教育基本法　第１条（教育の目的）
　教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

今の子どもたちが生きる、これからの 60 年、70 年、80 年の日本の姿を見据え、子どもたちの幸せを保障するために、「人」とのつながりを得る場が「学校」「授業」であるという考えのもと、授業を構築していく。